地域発展へ高まる期待

松本組・森川組の特定JV
新中山トンネル貫通式挙行

【函館発】函館開建発注の「一般国道227号厚沢部町外新中山トンネル工事」を施工する松本・森川JVは12日、北斗市内のトンネル起点側で貫通式を執り行った。工事関係者と地元自治体の首長ら来賓を合わせて約130人が出席。無事に貫通を迎えたことを祝うとともに、渡島・檜山両地域の発展に向け早期開通を願った。

新中山トンネルは、厚沢部町と北斗市の境に建設する延長781㍍、幅員9㍍、内空断面積56・3平方㍍の構造物。峠の危険個所を回避し、道路交通の安全を確保することを目的としており、㈱松本組（函館）と㈱森川組（同）の特定JVが施工している。

厚沢部側からNATMによる掘削を進め、開始から13ヵ月が経過したことし6月に貫通。貫通式には松本組の大越雄司社長、森川組の森川順治専務をはじめとする施工関係者のほか、函館開建の甲斐明函館道路事務所長や渋田正己厚沢部町長、池田達雄北斗市長らが出席した。

貫通の儀では、これまでの工程が動画で紹介されたあと、6月の貫通掘削の様子が映し出され本貫通の臨場感を再現。参加者一同がその雰囲気を共有し、映像終了と同時に幕が取り除かれ北斗側坑口からの光が眼前に広がると、校内に大きな拍手が湧き上がった。

長谷川元気所長の指示のもとJVの職員が貫通点を確認し、所定の出来形で貫通したことを報告。甲斐所長が「ご苦労さまでした」とねぎらいの言葉をかけた。

続けて、大越雄司社長や甲斐函館道路事務所長らが貫通点を前に向き合い、握手の儀。固い握手を交わしたあと、万歳で喜びを分かち合った。

甲斐所長は、当初計画どおり貫通を実現したJVの技術力に敬意を表し「無事故・無災害での完成を」と要請。渋田町長と池田市長は、新中山トンネルの完成によって渡島・檜山の物流・人流が活性化することで道南圏の経済発展につながるとし、早期開通に期待を寄せた。

大越社長は、長きにわたって現場に従事してきた現場職員と作業員をねぎらった上で「自らが手掛けた構造物が形となって残り、未来の発展に寄与できることは大きな喜び」と強調。残りの工事について「全力で取り組んでいく」と決意を新たにした。

貫通点で万歳する大越社長（左）と甲斐所長

一般国道227号

新中山トンネルが貫通
大動脈の安全な通行確保へ前進

函館開建が進める一般国道227号渡島中山防災事業のメイン工事として、昨年5月から掘削がスタートした新中山トンネルが1年余りを経て貫通した。函館と檜山南部を結ぶ大動脈の安全な通行の確保に向け、大きく前進。23年度の事業完了および供用開始への期待が高まる中、来年1月の完成を目指して引き続き整備を進めていく。

北斗市と厚沢部町の境界に位置する中山峠は、1858年（安政5年）に道路開削がスタート。1924年（大正13年）に旧中山トンネルが完成した。53年（昭和28年）に2級国道の指定を受け、62年から2代目となるトンネルに着工。66年に延長580㍍の現トンネルが完成し、現在に至っている。

この間、地域住民の暮らしを支える生活道路、函館と檜山を結び産業・経済を支える大動脈としての機能を発揮。地域の振興・発展に大きな役割を果たしてきた。

しかしながら、現トンネルは建設から50年以上が経過。老朽化が進み、漏水への対応など各種補修を繰り返していた。トンネル前後を含む地すべり等の危険個所と隘路区間の解消を図るため、函館開建は現道南側に別線トンネルを建設する計画延長1・4㌔㍍の渡島中山防災事業に着手した。

新中山トンネルは延長781㍍、内空断面積56・3平方㍍。幅員は9㍍で、現トンネルよりも1・1㍍広くなる。施工は㈱松本組（函館）と㈱森川組（同）の特定JVが担当。松本組は現トンネルを施工しており、新旧両方の建設に携わることとなる。

施工に当たっては、起点側坑口から90㍍付近にトンネルを横断する沢部があり、最小2・1㍍の低土被り区間となっていたため、押え盛土としてソイルセメントを用いて土被りを確保。同区間通過時の安全確保のため、リアルタイム地表面沈下測定も実施した。

冬期間は最大2㍍の積雪があり、気温もマイナス10度となる中で設備の凍結防止対策やダンプ、交通誘導員の安全確保に万全を期した。

建設DXにも対応し「現場の見える化」を推進。AGF工の注入管理、防水シート加圧・負圧（漏水）試験、吹付コンクリートの製造・品質管理をICT化したほか、ウェアラブルカメラを用いた遠隔臨場による検査を実施。フルスペックの濁水処理プラントを配備したり、無効電力制御装置を使用するなど環境保全にも配慮した。

NATM上半先進ベンチカット工法による掘削を進め、着工から1年余りを経て6月23日に本貫通。ブームヘッダーが最後の岩盤を貫き一筋の光が差し込むと、現場内に大きな歓声が響き渡った。12日には貫通式が挙行され、無事に貫通を迎えたことを祝うとともに、工事完成までの安全を祈念した。

作業所長を務める松本組の長谷川元気土木部次長は「現在使用されている中山トンネルも当社で施工しており、半世紀を経て、またこの地でトンネル建設に携われることは非常に光栄」との思いを説明。「工事も残り半年余りとなるが、この工事のテーマである〝明るく・笑顔で・ゼロ災害〟を成し遂げ、高品質で安全なトンネルを造り上げたい」と決意を新たにしている。

今後は覆工やインバート工、防水工、排水工などを推進。来年1月のトンネル本体完成を目指す。その後も舗装や付帯設備、トンネル前後の改良工事を進め、23年度の開通を予定している。

同路線では年間200件程度の救急搬送があり、物流の安定化・効率化はもとより「命の道」としての役割も担う。駒ヶ岳噴火時の避難路・代替路線でもあり、開通への期待は日増しに高まっている。

ブームヘッダーが最後の岩盤を貫き、一筋の光が差し込んだ

祝　新中山トンネル貫通

松本・森川特定JV
株式会社松本組
代表取締役社長　大越雄司
本社　函館市吉川町四番三〇号　電話㊷七一三一番
札幌支店　札幌市北北二条西三丁目二番二号　電話757-八八一八番
月形本店　月形町字陽楽町一五一六番地一　電話㊸二〇一一番

ISO9001：ISO14001認証登録
DRB（災害支援基地）
ネットワークを通じて、地域に密着した貢献を実践します。
地域に根差す建設業
未来を建設　地域貢献の道を拓く
特定建設業
株式会社森川組
代表取締役社長
森川基嗣
本社
函館市海岸町9番23号
電話（0138）41-3126
札幌支店
札幌市北区北10条西1丁目10-1
電話（011）769-9008

Docon
株式会社ドーコン
代表取締役社長　佐藤謙二
本社　札幌市中央区大通西四丁目一番地　新大通ビル
電話代表〇一一一801－一五〇〇番
FAX代表〇一一一801－一六〇〇番